

《研究ノート》

日本におけるリカードウ研究の特質*

——吉澤芳樹の経済学史研究を事例として——

石塚良次**

I はじめに

本稿の課題は、この国における古典派経済学研究の特質あるいは偏倚の一端を探ることにある。我々はその際、吉澤芳樹（以下敬称略）のリカードウ研究を素材として取り上げる。リカードウ研究を取り上げるのは、それが第2次大戦後の一時期日本において支配的であったマルクス経済学の影響がもっとも顕著にあらわれている経済学史研究の領域であるからであり、吉澤を取り上げるのは、ひとりの卓越した知性による、その知的環境との苦闘を通して、この国における経済学史研究の問題状況みとることができると考えるからである。¹⁾

最初に、本稿での問題意識にそって、リカードウ研究の流れをピエロ・スラッファ（1898-1983）の問題提起を軸に概観しておく。スラッ

ファは、イタリア生まれの経済学者であったが、J. M. ケインズに請われてケンブリッジにわたり、そこで『リカードウ全集』の編纂に携わる。この『全集』は、モーリス・ドップの協力をえて、1951年から刊行を開始し、71年に第11巻をもって完結した。その編集は当初の予想をはるかに超えて手間のかかる仕事となったのだが、その理由のひとつはJ. S. ミルやマルサスなどの書簡などの新資料の発掘であった。それらの新しく発見された史料はもとより、リカードウの主著である『経済学および課税の原理』（以下『原理』と略称）の各版での異同についての詳細な編者注にみられる文献考証は、その後のリカードウ研究に大きな影響を与えることとなった。

しかしながら、その影響は単なる新史料の提供にとどまるものではなかった。スラッファが『リカードウ全集』の第1巻『原理』に付したやや長めの「序文 introduction」で提起したリカードウ理論についての独自の解釈（短く簡潔に書かれていた）が、リカードウの経済学理論の研究に衝撃を与えたのである。それがなぜ衝撃的であったのかを日本での文脈に即して言うならば、それまで支配的であった考え方、リカードウは労働価値説に立脚していた、という解釈に根本的な変更を迫るものであったからであ

*本稿は「第34回リカードウ研究会」（2016年12月25日、立教大学）での報告原稿をもとにしているが、全面的に加筆補正した。研究会においてご教示をいただいたリカードウ研究者の方々、および改稿に際してアドバイスをいただいた宮本光晴氏に感謝する。

**専修大学経済学部兼任講師

る。

本稿の主題は、そのようなスラッファの理論的貢献が日本のリカードウ研究にどのような影響を与えたのか、あるいは与えなかったのかを、吉澤のリカードウ研究を通して探ることにある。結論から言うならば、吉澤は、おそらくはその影響圏から脱出をはかろうと意図したにもかかわらず、この国に伝統的なマルクス『剰余価値学説史』的なりカードウ解釈から脱することはなく、そのためにスラッファの影響を受けることがなかったということである。そのような中で吉澤のリカードウ研究は隘路におちいったのではないか。

以下、Ⅱにおいて、スラッファのリカードウ価値論解釈を簡潔に紹介し、それがマルクスの労働価値説とどのように関わるのかを見る。そのうえで、Ⅲでは、吉澤のリカードウ研究の全体を回顧する。Ⅳでは、吉澤へのスラッファおよび内田義彦の影響を検討し、吉澤の置かれた問題状況を検討し、結びとする。

Ⅱ スラッファのリカードウ解釈

初期のリカードウは農業における利潤率が経済全体の利潤率を決定すると述べているのだが、その命題をスラッファは次のように解釈する。

「農業利潤のもつ決定要因としての役割の原理の合理的基礎は、……農業においては穀物という同一の商品が資本と生産物の両者を形成している、したがって総生産物と前貸しされた資本とのあいだの差額による利潤の決定、および資本にたいする利潤の比率の決定もまた、価値評価の問題とはなんらかかわりなく、直接に穀物の分量間でこれを行うことができる、という点にある。」(スラッファ [11] xlv 頁)

通常の産業においては、投入される原材料や機械と産出される生産物とはその物的形態がことなっているため、投入財の量に対して産出財の量がどれだけ増えたかを直接計測することはできない。1台の旋盤を使って歯車を10個作り

出したことを知り得ても、そこから直接に利潤の量を知ることはできない。なんらかの尺度に換算する必要がある。だが農業(穀物生産)においては、穀物を種子として投入し、生産物もまた穀物なのだから、穀物という物的な数量そのものを尺度として利潤(率)を計測しうる。しかもこの穀物は賃金財として他のすべての産業の投入財となるという意味において、後に述べる「基礎財」としての性格ももつ。

「そこでこういうことになる、すなわちもしすべての産業に均等な利潤率が存在すべきであるとすれば、穀物の栽培において樹立されたと同じ利潤率を生じるよう調節されなければならないのは、他の産業自体の資本と比較した(すなわち穀物と比較した)それらの産業の生産物の交換価値のほうである、というのは、農業においては、生産物も資本も共に同じ商品から成立しているため、いかなる価値変化も資本にたいする生産物の比率を変更しえないからである」(同上)

要約するならば、スラッファはリカードウのなかに、穀物比率論とよばれる論理を見出したのである。

スラッファによれば、リカードウはこれに加えて、もうひとつの重要な命題を提起している。「それは、賃金の上昇はあらゆる商品の価格を引き上げるであろう(「アダム・スミス、および彼を継いだすべての著者が」そうなるであろうと主張したように)ということが、たんに誤っているだけではなくて、むしろその反対に、それは多くの商品の価格を下落させる、という得意な triumphant 結論をもたらした。」(同上, xlv)

しかしながら、この主張を十全に基礎づけるためには、分配から独立した価値尺度が必要であり、それこそがリカードウを終生悩ました(とスラッファが解釈する)不変の価値尺度問題である、とスラッファはいうのである。スラッファは以下のように書いている。

「『経済学における主要問題』は、彼の見解で

は、国民生産物の諸階級への分割ということであるが、その研究の途上において、彼は、この生産物の大きさが、この分割が変化すればあいに変化するように思われる、という事実によって悩まされた。」(同上, lxv)

「それだから、リカードウが関心をもった価値の問題は、生産物の分割の変化の影響をうけないような価値の尺度を、どうして発見するかということであった。というのは、もしも賃金の上昇または低下が単独で社会的生産物の大きさに変化をもたらすとすれば、利潤に対する影響を正確に決定することは困難であろうからである。(もちろん、これは、リカードウの利潤についての穀物-比率論に関連して前に述べたものと同じ問題であった。)」(同上, lxvi)

スラッファは、これらの解釈をリカードウの書簡などを援用しながら論証している。しかしながら、スラッファのこのリカードウ解釈のもつ意味は、その発表当時は、十分に理解されることはなかった。そのリカードウ解釈の意味が、多くの人びとに理解されるようになったのは、スラッファの生涯唯一の著書である『商品による商品の生産』(1960年、以下『商品の生産』と略記)が公刊された以後のことであった。

スラッファは、そこでレオンチェフ型の投入産出モデルを基礎にして、投入財の物的構成と産出財の物的構成が等しくなるような体系を導き出し、それを「標準体系」とよんだ。そしてそのような構成比をもつ合成商品を「標準商品」と名付けたのである。

スラッファのこの本は、当時(そして現在も)経済学の主流をなしていた新古典派経済学に代替する経済学の基礎理論を提示するものであり、実際そのようなものとして、その後の「ケンブリッジ資本論争」で、J. ロビンソンなどによって理論的なよりどころとされたのである。したがって、スラッファは、その独自のリカードウ解釈によって、リカードウの経済理論を現代の経済学の最前線へと復活させたということができる。そのような意味において、スラッファの

リカードウ解釈は画期的だった。

しかしながら、日本において当時主流をなしていたマルクス経済学に基づくリカードウ研究は、スラッファのこのような問題提起的なリカードウ解釈を受け入れることが困難であった。なぜなら、そこでのリカードウの位置づけは、『剰余価値学説史』に基づき、リカードウをマルクスの労働価値説の形成過程の一段階、通過点として位置づける、というものだったからである。スミスにおいて混在していた支配労働価値説と投下労働価値説を後者に純化したのがリカードウであるが、リカードウはそれぞれの生産部門において資本と労働との比率が異なる結果、投下労働量が交換価値を規制しない、という難題に逢着した。しかしながら、そのリカードウを悩ました価値修正論もマルクスに至って、価値と生産価格とを概念的に区別することによって最終的に解決された、とする理解である。

しかしながら、マルクスにおいてもその問題は解決はされていなかったのである。そのため、マルクス没後、価値から生産価格への転形問題として、ながらく議論され続けることになった。とりわけ欧米のマルクス経済学者たちにとっては、新古典派経済学の価格理論との対峙という学問的緊張のなかで、それは価格理論に残された大きなアポリアであり続けた。そのような中であって、スラッファの標準商品論は、実はマルクス『資本論』の転形問題について有力な示唆を与えるものであることが、早くから指摘されていた。

たとえば、ミークはスラッファの本が出た翌年に書かれた「スラッファ氏による古典経済学の復興」と題された書評論文でおおよそ以下のように書いている。

マルクスは「資本の平均的な有機的構成」を論じてはいるが、そこでは費用価格の生産価格化の問題は論じられていない。したがって、リカードウが問題にした賃金の変化が充用生産手段の価格におよぼすはずの影響を捨象しているので、「平均的構成」の産業部面で価値と価格

が一致するという事は近似的にしか言い得ない。ところが、スラッファの標準体系をもってすればこの問題は解決する。ミークは以下のような文言でその書評を締めくくっている。

「この観点からすれば、スラッファの『標準』産業というのは、本質的には、マルクスが探求していたのと同じ結論に到達するような仕方です。「平均的な生産諸条件」を定義しようとしたひとつの試みなのである」（ミーク、p.265）

日本のマルクス経済学者が、スラッファの問題提起の意義を受け止めることができなかつたことと対照的に、ミークはいち早くそのマルクスの転形問題についての意義を見出しているのである。ただし、ミークのこのようなスラッファ解釈をどのように理解すべきかは微妙な問題が伏在している。スラッファ自身は、標準商品論をリカードウ解釈として提起したのに対し、マルクス経済学者であるミークは、それがマルクスの逢着した難題に対する答えになると読んだのである。²⁾

その後、スラッファのリカードウ解釈に対する批判が噴出する。リカードウはスラッファのというような意味での不変の価値尺度など問題にしていなかったし、したがって、スラッファの標準商品論はリカードウが課題とした問題の答えにはなっていない、という批判である。そのことは、スラッファも認めており、彼はそれをリカードウ理論の「合理的再構成」とよんでいるのである。また、『商品による商品の生産』の末尾では、上述したようなリカードウ解釈が「念頭に浮かんだのは、現在の研究の過程で、標準体系および基礎財と非基礎財の区別が明らかになってからのことにすぎなかつた」（p.155）と書いているのである。つまり、最初にリカードウの解釈があり、そこから示唆をえて『商品による商品の生産』を書いたのではなく、自分のオリジナルな理論を構築していく過程で、リカードウのなかにも同様の考えがあつたのではないか、というアイデアが浮かんだ、というのである。

だとするならば、スラッファの研究過程において、マルクスの転形問題が念頭にあつたと想像してもあながち間違いではないのではないかと推測される。そもそも、スラッファの『原理』への「序文」は、モーリス・ドップの協力を得て書かれたことをスラッファ自身が証言している。だとするならば、そこにドップの影響があつたと考えることはあながち無理ではない。ドップは、リカードウとマルクスとの関連について次のように書いている。「リカードウは、資本の比率と耐久性との相違が及ぼす作用を、賃金上昇が諸価格に及ぼす異なつた作用というタームで表現したのに対して、マルクスは、それを生産価格が個々別々のケースに価値から乖離することをタームとして表現したのであつた。」（ドップ、p.185）

おそらくは、ドップ、ミーク、スラッファの間で、リカードウとマルクスを巡るこのような問題が継続的に議論されることにより、その問題意識が共有されていたのではないかと推測される。であればこそ、ミークは、スラッファの難解な本が出てすぐに、それがマルクスの転形問題にたいしての解答にもなることを明確な口調で述べることはできたのではないかと推測される。

いずれにせよ、イギリスでのそのような知的環境とは大きく異なつたこの国のマルクス経済学者にとっては、そもそもマルクスの価値論のなかに未解決の問題が残されている、ということ自体が意識に上つていなかったのではないかと推測される。であればこそ、スラッファの問題提起を自らの問題として受け止めることができなかつたのではないだろうか。

では、日本のリカードウ研究者はどのような問題を解こうとしていたのか。そして彼らに対し、スラッファはどのような影響を及ぼしたのだろうか。次章では、その一端を吉澤に即して見てゆきたい。

III 吉澤芳樹の知的環境

吉澤芳樹の経歴と業績の詳細については、別掲の年表を参照されたい。

吉澤の学問的環境については酒井進によれば、彼は「学部学生・大学院特別研究生時代をつうじて山田盛太郎のもとで地代論史の研究」をすすめたとのことである。³⁾学部時代には講座派マルクス経済学の正統的な教育を受けたと考えられる。

他方で内田義彦もまた吉澤に強い影響を与えた。内田もまた講座派に属する研究者ではあったが、その主流派とは一線を画しており、後に市民社会派とよばれる一群の研究者の代表的な人物のひとりであった。吉澤の回想によれば、「東大三年の時に、たまたま社会科学研究会に古典経済学研究の部会をつくりまして、私がおそのキャップをやったんですが、その講師をお願いに内田先生の目黒のお宅に伺ったのが最初」（吉澤【26】p.156）とのことである。その後、内田の家での研究会（吉澤は「寺子屋」とよぶ）の常連となったのであるが、そのあたりの消息については、『内田義彦著作集』の月報に吉澤が書いている文章に詳細に書かれている。

内田義彦は「私にとっては四十年にわたる学問上の師であった。といっても、大学で講義を受けた先生ではなく、一九四九年、東大(旧制)三年生のとき、社会科学研究会に古典経済学部会をつくらうということになり、鷹番町の内田家をたずねて講師をお願いして以来の先生である。この研究会では『資本論』をほぼ隔週にやったが、テーマは古典経済学の形式論理的範疇展開に対するマルクスの批判の論理を明らかにすることに置かれた。最初の報告は『資本論』第一部第三～第五編についてで、私がやることになった。一時間半ほどの報告を終えた後、内田さんから、マルクスの「絶対的ならびに相対的剰余価値」という把握の、「ならびに」の意味が鮮明に出ていたと評価されて、私はほっと

した。そして帰り際に、お宅での勉強会にくるように誘って下さったのである。」（吉澤【21】p.4）

その後吉澤は専修大学の講師となった。上記の随筆では、山田と内田とに対する関係を次のように書いている。「私の学部時代、特別研究生時代の指導教授は、『日本資本主義分析』の著者、山田盛太郎先生であったが、若い私には余りにも大きく重たい存在であった。だから、十五歳年長の内田さんの寺子屋によって、辛うじて私は研究者の道を歩み続けることができた。その上、特研五年間を終えて宙ぶらりんのとき、専修大学の教員仲間に加えても下さった。前年に東大を定年退官された山田先生も専修大学に迎えられていたから、私は口の悪い同僚から「二重の桎梏だな」と冷やかされることにもなった。」（吉澤【22】p.4）専修大学に吉澤をよんだのは内田と思われる。（ただし、吉澤退職時の経済学部長、泉武夫の「献辞」によれば山田盛太郎の要請とのこと。泉〔4〕）その後吉澤は専修大学において、経済学史担当として内田の講座を継承している。

IV 主要論文

次に吉澤の研究業績を以下の6本の主要論文に即してみてもゆくが、あらかじめ吉澤のリカードウ研究の概要を示せば以下のようなようになる。

経済学史研究の基本的な方法として、吉澤は過去の経済学がどのような歴史的課題を解くために成立したのか、という歴史的アプローチをとる。第2次大戦後の日本のリカードウ研究は資本蓄積論を主軸に進められるのだが、リカードウの歴史的課題はふたつ。第1にはナポレオン戦争後の1815年の過渡的恐慌にたいする地主的対応策としての穀物法(穀物輸入高関税政策)が利潤率と資本蓄積に与える影響、そして労働者階級への影響という経済的時事問題。第2には、議会改革運動という政治的時事問題。これらを単なる時事問題に終わらせるのではなく、

資本蓄積論の問題として解こうとしたのがリカードウ経済学である、という認識。リカードウは正常な資本主義においては、発展的社会状態はやがて富と人口が不変の状態が続く停滞的社会状態にいたるといふ。そのような視点から、1815年恐慌をみるならば、それは戦時から平和への移行にともなう「貿易路の急変」から生じたものに過ぎない。しかし、そのようななかで穀物法によって高穀価政策を維持すれば資本蓄積は阻害され、失業は長期化する。そうなると労働者はますますモップと化してアナキズムへ傾斜する。そこから穀物法の撤廃という経済政策が導かれるし、そのうえで資本蓄積を維持し、労働者階級へ選挙権を拡張するという自然的社会=自然的国家を展望する。

おおよそ、このようにリカードウ経済学を吉澤は捉えた。以下、それぞれの論文についてみてゆくが、いずれも論文全体の紹介を意図するものではなく、本稿の視点からの要約である。

1 「古典経済学の完成——1817年とデイヴィッド・リカード」⁴⁾ (1953年1月)

この論文が所収された出口雄三編『経済学史』はその第四章が「古典経済学」で、最初のふたつの節、「問題の整理と限定」、「古典経済学の成立——一七七六年とアダム・スミス」を内田義彦が執筆している。

この論文ではフランス革命以後のヨーロッパの戦争と平和、それにともなう1815年恐慌の問題を考えながら、リカードウの資本蓄積論と過渡的恐慌分析との関連を論じている。リカードウ研究の基軸に資本蓄積論をおき、そこから恐慌や穀物法の問題を位置づけている。その意味で、吉澤のリカードウ研究の礎石が据えられた論文とみてよい。次に取り上げる論文で主題となっている議会改革論は、ここでは直接言及されていないが、注では次稿で扱うことが示唆されている。(正確に言うならば、吉澤の議会改革論論文は、1968年だが、後述するようにその

内容はすでに、1955年には書かれていたとのことだ。だとすればこの論文の2年後ということになる。)

吉澤はこの論文で、恐慌や穀物法についてリカードウの議論をマルサスと対比しつつ論じ、さらには、リカードウの蓄積論を価値・剰余価値論の基礎の上に論じている。後に論じる「発展的社会像」などの概念はさすがにまだ見えないが、それらの議論もここでのリカードウ資本蓄積論を基礎として展開していると読むことができる。

そのような意味で、この論文は吉澤のリカードウ研究の出発点であり、全体の土台をなしている。ここでの主題がリカードウの経済学であることはいうまでもないが、その際に適用される理論枠組み、基礎概念はマルクスのものである。たとえば、吉澤は以下のように書いている。

「リカードは、のちにみるように、事実上労働力をひとつの商品として把握し、この商品を生産するのに必要な労働量、すなわち生活資料の価値によって「賃金」を規定する。それゆえスミスの「支配」労働価値説は、かかる労働力の価値＝「賃金」によって商品の価値を決定するところの謬説としてしりぞけられる。このようにしてリカードは、古典価値論を「投下」労働価値説へと純化し、その基礎のうえに(相対的)剰余価値論を完成したのである。」(p.183)

2 「リカードウの議会改革論と経済学的分析視角」(1968年11月)

前節で扱った論文が当時としては優れたリカードウ論であったことは確かだが、研究者としての吉澤のオリジナリティという点から評価するならば、議会改革論を主題的に論じたこの論文をまずはあげるべきであろう。この論文自体は、1968年に公刊されているのだが、論文中の注によればこの論文は「地主批判としてのリカードウ経済学の基礎構造」(1955年3月、大学院特別研究生修了時)の第1章の主要部分であ

るとのことである。⁵⁾

内容の検討に入る前に、論文の注で吉澤がその問題意識のよってきたる所以を書いているので、引用しておく。

「リカードウの議会改革論に私が取り組みはじめたのは、内田義彦教授の旧稿「イギリス重商主義の解体と古典学派の成立（上）」（潮流講座『経済学全集』第八回，昭和二四年十一月刊）——名著『経済学の生誕』の一原型——の中の一つの註（同論文，一一頁）に、リカードウの論説「議会改革にかんする考察」Observations on Parliamentary Reformへの言及があったことに始まる。「一 序章——基礎過程」の中の一頁近くにわたるこの註は、この論文がもともと（下）においてリカードウを扱う予定で、スミスとリカードウとの段階的相違を示すために書かれたのであるが〔潮流『全集』の中絶のため、（下）はついに執筆されなかった〕、『生誕』ではスミスに集中してリカードウを対象から外したために、この註もまた外された。（続けて内田からの引用があるが省略——引用者注）リカードウの議会改革論の存在に注目したのは、日本では内田教授がおそらく最初であろう。」（吉澤【6】p.91）

これを読む限り、吉澤がリカードウの議会改革論に着目したのは内田に示唆をえたことによることは間違いない。さらに読み込むならば、議会改革論にとどまらず、そもそもリカードウを研究テーマとすることを方向付けたのも内田義彦とってよいのではないか。内田が書かなかった（下）のリカードウ論を吉澤は書こうとしたと理解してよいのではないか。仮にそのように読むことが可能だとしたら、吉澤のリカードウ研究を初発から方向付けていたのは内田義彦ということになる。後年吉澤は次のように書いている。「内田義彦のスミス研究にリカードウ研究をつなげることを意図して、「古典派蓄積論の『完成者』リカードウ」という把握を打ち出した」。（吉澤【18】p.30）さらに忖度するならば、内田はその後、本格的なリカードウ

論を書いていないが、吉澤との棲み分けを意識していたとも考えられる。

上記の内田の論文は現在『著作集』に所収されている。（内田【5】p.188）おそらくは内田のこの注が吉澤のリカードウ議会改革論の大枠を方向付けているとみなしてよい。内田のここでの指摘を簡単に要約すれば、資本主義の確立にともなって、資本による形式的包摂から実質的包摂の完成に至った段階がリカードウの時代なのであり、そこでは源蓄過程にあらわれるような資本の暴力性は背後に隠れてしまう。だから、リカードウは経済学において、かくも陰惨な世界を描きながら普通選挙に対する楽観的な見解を示しえた、ということである。内田のこの見解に対し、吉澤は楽観的とはいっても「アナキズムの危険を考慮して、さしあたり二段階普通選挙論を唱えたのである。もちろん、ひとたび議会改革が達成された後のこととしては、普通選挙に対する楽天的な見通しを立てていたのであるが」（吉澤【6】p.92）と留保つきではあるが全面的に受け入れている。

吉澤によれば、リカードウの議会改革論の特徴は、資本制生産様式は労働者を実質的に包摂している以上、選挙権を人民に拡張しても労働者を無政府主義の側へ追いやることはないのであり、地主階級のような議会改革への反対こそが労働者をアナキズムの側に追いやってしまうという主張にある。実際、1815年の地主的穀物法がナポレオン戦争後の恐慌と失業を長期化させ、ついには無政府主義を生み出した、とリカードウは指摘する。むしろ、穀物法を撤廃し、自由貿易政策をとれば、高度の資本蓄積が持続的に進行し、雇用の増大と高賃金が実現するのだから、労働者階級は無政府主義の扇動にのせられるようなことはなく、体制内存在になるというのである。「資本制生産様式に対する完全なる自信と楽観」（吉澤【6】p.125）の背後には、リカードウのそのような経済学、資本蓄積論、さらには利潤論、賃金論があったと吉澤はいう。

それまでもリカードウの政治的自由主義者としての議会改革論の分析がなかったわけではないが、それが経済学の理論、すなわち資本蓄積論を基礎としている、という点についての認識が欠落していた、ということ吉澤は主張したかったのであろう。リカードウ研究史上、吉澤のこのような理解がどのような意義をもつのかについては、ここでは判断を保留するが、吉澤のリカードウ経済学に対するスタンスは、初発から狭義の経済理論に限定されていたのではなく、より広範な視野に開かれていたことは確かである。

3 「マルクスにおけるリカードウ理論の発見と批判」(1970年3月)

この論文は、他とは異なりリカードウではなくマルクスを主題としている。当初、吉澤はリカードウ研究の理論的基準をもとめて「マルクスのリカードウ批判」をフォローしたとのことだが、やがて「批判」のみではなく「発見と批判」へと焦点が移動したと書いている。マルクスがリカードウを批判した、という側面だけを捉えるのであれば、平板になってしまうが、マルクスにとっては批判とともにリカードウ理論の意義の認識という意味での「発見」があったはずだ、ということであろう。そのように捉え返すことによって、リカードウ＝マルクス関係をよりダイナミックに理解することができるというのであろう。

この論文をマルクス研究と位置づけるならば、とりたてて目新しい論点が提示されているわけでもなく、その評価は高くはない。たとえば、『ドイツ・イデオロギー』の社会的分業の発展史について、かなりの紙幅を割いているにもかかわらず、その主題については当時議論の中心であった望月清司の業績⁶⁾には一切言及されていない。望月が大学の同僚であったことを勘案するならば、それは奇妙でさえあるが、同じく内田義彦、平田清明のマルクス研究に触発され

ながら、新しいマルクス像の構築を目指すものとして望月とは別の方向を目指していたことの表れかとも推測される。

1840年代マルクスの読み方の、たとえば望月とは異なる吉澤独自の視点が垣間見られる箇所をあげるならば、次の文言がそれにあたる。『哲学の貧困』を分析しつつ吉澤は以下のように書いている。

「パリ時代のマルクスにはなかったリカードウ価値論の体制分析にもつ礎石的意義への開眼が、『ドイツ・イデオロギー』のマルクスにはなかった大工業の生産力構造の認識と同時に現れ、結合されるに至った。」(吉澤【7】p.31)

大工業の巨大な生産力への認識は50年代にさらに飛躍的に発展するのだが、吉澤はそれを単なる時論的認識の発展と捉えるのではなく、経済学の理論、その基底にある価値論のマルクスによる認識の発展と結びつけて捉えようとする。これは、吉澤のリカードウ研究、さらには経済学史研究の基本視座によるものであろう。吉澤のこの論文の扱う範囲は40年代のマルクスにとどまっているが、本来であればそれに続けて50年代のマルクスの分析にその視点が貫かれてこそ真価を発揮するものであったかと思われる。

しかし、本稿もまたその課題を「次稿で検討したい」(吉澤【7】p.54)と先送りする。その後「次稿」が書かれることはなかったが、吉澤の構想のアウトラインは次に取り上げる論文にかいまみることができる。そこで吉澤は次のように書いている。「『学説史』におけるマルクスのリカードウ批判の意味は、40年代とは異なる50年代マルクスのポジティブな資本主義像の形成という土俵(『要綱』)のうえで、今あらためて問われねばならないのである。」(吉澤【8】p.7)ただし、それに続く本論は、もっぱらリカードウについての論述であり、マルクスへの言及はみられない。

資本主義が生み出した大工業、その巨大な生産力への着目は、内田義彦のマルクス研究の視点を引き継ぐものであることは明らかである。

そのような、資本主義のポジティブな側面への認識を強調することによって、吉澤は従来の講座派の正統派的理解から一線を画そうとしたのであろう。しかし、内田がスミスのなものをマルクスに対比させることによって、マルクスの読み方に新風を吹き込んだのに対し、吉澤のリカードウはそのような効果をもたらしたとはいえない。

4 「発展的社会把握におけるリカードウとマルクス」(1970年6月)

リカードウの上述のような資本蓄積論、「発展的社会状態」(advanced state of society)という社会像をマルクスのそれと対比させてみようとしたのが「発展的社会把握におけるリカードウとマルクス」である。リカードウが自由貿易が実現しさえすれば、労働者は確実に体制内に包摂できる、と考えたのに対し、マルクスはその「同じ高度生産力の世界に恐慌と失業(貧困)」という内在的矛盾を——また階級闘争の必然性を——見出す(吉澤【8】p.7)と吉澤は書いている。リカードウ研究者の吉澤がここであえてマルクスを対比的に持ち出してきたのは、その当時新しく始まりつつあったマルクス研究の潮流を参照しつつリカードウを顧みることによって、「リカードウ研究をトリヴィアリズムから解放すること」(吉澤【8】p.8)ができると考えたからであろう。(トリヴィアリズムとの指摘は、(吉澤【7】p.7)にもある。)さらにいうならば、そのことによってリカードウ研究を新しいマルクス研究に拮抗するような高みまで押し上げることができる、と期したのかもしれない。いずれにせよ、吉澤はリカードウ研究者でありながら、マルクス研究(者)に強い対抗意識をもっていたようにみえる。しかし、この論文の冒頭でかなりの紙幅をあててマルクスについて言及し、リカードウと対比させているにも関わらず、それに続くリカードウの発展的社会把握をあつかった本論で、

その問題意識は十分に活かされてはいない。リカードウに内在して分析する本論ではふたたびマルクスに言及されることはない。あえて厳しい言い方をすれば、「リカードウとマルクス」という表題は羊頭狗肉である。

ここでの吉澤の主張を要約すれば以下のようになる。

上述したようにリカードウは穀物法の撤廃と議会改革を主張したのだが、その背後には資本蓄積論があり、リカードウが描いていた資本主義は「発展的社会」像において表象されていた、と吉澤は言うのだが、その発展的社会像をさらに立ち入って分析したのが、この論文である。

リカードウは、発展的・停滞的・衰退的の3つの社会状態を区別している。しかしそれはしばしば誤解されるように、同じ資本主義の3つの状態ではなく、正常な資本主義には衰退的状态はありえない、というのがリカードウの考えだと吉澤は言う。正常な資本主義は発展的社会状態からやがて停滞的な社会状態へといたるが、衰退的社会状態にいたることはない。その背後にある論理は、資本蓄積→人口増→食料増産→劣等地耕作→収穫減→農産物価値の上昇→自然賃金の上昇→利潤率の低下→追加投資の停止=蓄積の停止、である。吉澤は、それに加えて資本蓄積にともなう市場賃金と自然賃金との関係について論じているが、その点については省略して⁷⁾結論のみを記せば、「発展的社会では、過剰人口の社会的圧力は比較的短期にすぎぬ」のに対し、「衰退的社会の過剰人口は体制的危機の要因」(吉澤【8】p.19)になるというのがリカードウの考えだと吉澤は言う。

「問題解決のカギは、発展的社会像をいかにして実現するか、にある。穀物法を廃止せよ！そしてイギリスの大工業の商品と交換に、後進的農業国より安い穀物を自由に輸入せよ！……(中略)……発展的社会の実現後は普通選挙にすべきだし、また安んじてそうしうるのであろう(2段階普通選挙論)。かくして、経済的にも政治的にも、「最大多数の最大幸福」が実現する。

——ベントム主義者リカードは、こう考えたのである。」(吉澤【8】p.20)

吉澤は論文をこのように結ぶが、上述した議会改革論と資本蓄積論がここで結びついている。そのようにしてリカード像を再構成したうえで、それを批判的に継承しようとした50年代、60年代のマルクスの苦闘へと結びつけようとしたのであろうが、それは吉澤にとって未完の課題となった。⁸⁾

5 「リカードの価値論と分配論」(1983年3月)

上記の論文に続く研究として取り上げるべきは「リカードの価値論と分配論」である。前節でとりあげた論文からは10年あまりの年月が過ぎているが、その間にはリカード研究の業績として、みるべきものはない。満を持して書かれたのがこの論文ではあるが、読者はこの論文の意図するところ、主題を即座に理解することは困難であろう。

この論文で吉澤は、堀経夫の解釈、「リカードの分配論に富の分配論と価値の分配論との二重構造をみる」という考え方を批判する。吉澤は、かなりの紙幅をあてて堀説を批判するのだが、その紹介は省略して結論のみを記せば、「リカードの分配論は価値分配論として一貫していること、したがってリカード分配論に「富の分配」と「価値の分配」との二重の観念の存在をみる堀経夫氏の解釈は誤謬である」(吉澤【17】p.28)ということである。その際、「リカードの価値分配論(ないし利潤理論)の支柱として、貨幣価値論(不変の価値尺度論)がその論理的前提条件として決定的意味をもつ」と吉澤は言う。

しかしながら、そのような議論を展開するのであれば、多くの読者はスラッファの穀物比率論、不変の価値尺度論との対質を求めるのではないか。しかし、先に引用したように、吉澤はスラッファの不変の価値尺度論には言及する必

要はないと断ずる。筆者には、そのような吉澤の態度はかたくなにスラッファを回避しようとしているようにみえてならない。先に検討した議会改革論や定常状態についての議論であれば、スラッファの問題提起に直接関わる必要はない。しかし、価値論、分配論を扱うならばその問題提起を避けて通ることはできないはずである。

吉澤は続けて、リカードのある文言の逐語的な解釈を試みるのだが、我々からみるならば、吉澤のリカード解釈は、リカードが労働価値説に基づいている、ということに疑うことのできない前提として議論が組み立てられている、としか見えない。たとえば以下のような文言である。「リカードは賃金率を限界耕地・限界資本の生産する穀物量の分割割合で考える。だが、そこでの投下労働量はつねに一定と前提されているから、穀物の分割割合は実は価値の分割割合にはかならない。……(中略)……分配論における穀物タームは使用価値タームではなく、価値タームなのである。……(中略)……貨幣タームも、貨幣価値不変(不変の価値尺度)を前提している限り、たんなる価格タームではなく、価値タームと理解すべきである。」(吉澤【17】p.40-1)

リカードが穀物比率で論じたとしても、労働価値論を前提としているのだから、それは(労働)価値比率なのである、ということ吉澤が言いたいのだとしたら、そのような理解は、スラッファのそれと交わることはない。吉澤もまた、他のマルクス経済学者と同じく、リカードが行き詰まった難題である価値修正論はマルクスによって最終的に解決されたのであり、その意味ではリカードはマルクスの投下労働価値説の未熟な先駆者である、という見方をなんの疑いもなく共有しているとしか見えない。そのような解釈は、リカードの価値論を教条的マルクス解釈に引きつけた読み方であろう。マルクスはスラッファとは異なり、リカードの不変の価値尺度という課題設定に対してはその意義を認めてはいなかったと思われる。

リカードウの文言を虚心坦懐に読む限り、そこにひとつの整合的、体系的に組み立てられ価値論・分配論を読み取ることは難しいのではない。スラッフアの解釈は、おそらくはリカードウそのものの姿とは異なるであろうが、しかしリカードウのうちに合理的理解が及ばない部分があることを認め、それを合理的に再構成しようとしてきたところに生まれてきたひとつの解釈であることは間違いない。

リカードウの文言は理解が難しい部分があるのだが、たとえば吉澤が解釈を試みている一例がそうである。(リカードウ [11] p.55)

「われわれが地代、利潤、賃金の騰落を判定するのは、どれか特定農場の全土地生産物の地主、資本家、労働者という三階級への分割による……」というの、もちろん穀物の三階級への分割のことであり、直接には使用価値視点に立っている」(吉澤 [17] p.24) と吉澤はリカードウを引用しつつ敷衍している。しかし、リカードウがそれに続けて書いているのは、「帽子、上衣、穀物」の分割比率であり、「穀物の三階級への分割」ではない。吉澤はここでリカードウが穀物だけでなく帽子や上衣をあげている点については「リカードウのケアレス・ミス・ステイク」(吉澤 [17] p.28) と断定する。「帽子、上衣といった製造品ではなく、穀物についてみるべきである。」(同上) その理由は述べられていないが、吉澤はリカードウの誤謬とした上で、農場で穀物が生産され、その穀物がそのまま現物で分配されると解釈したようである。

たしかに、穀物ならともかく農場で帽子や上衣が生産され、それが現物で分配されるとは考えにくい。とはいえ、吉澤のようにリカードウの誤謬と一刀両断すべきではない。同じ文言は初版にも第3版にもあり、若干の修正がなされているが、帽子や上衣の例はそのままである。それをケアレスミスとするには、それなりの傍証が必要であろう。(羽鳥・吉澤訳の『原理』の訳者注でも、この箇所がケアレスミスであるという指摘はない)

リカードウが言いたかったのは「穀物の三階級への分割」ではなく、帽子であれ上衣であれ、その絶対量ではなく、それらの数量の他階級が入手した数量と比較した分割比率で騰落を判断すべきである、ということであろう。仮に帽子の労働生産性が変動し、それに応じて価格が変動すれば、資本家が手にする帽子の数量は異なるだろうが、騰落の判断の基準とすべきはその数量そのものではなく、労働者や地主が入手した帽子の数量と比較した数量であるべき、ということであろう。

これに対し、吉澤は、それらを投下労働量としての価値に還元したうえで比較すべき、というのがリカードウの意図していることであり、したがってそのような意味でこの例も「価値の分割」であると解釈する。リカードウのこの文言については、羽鳥卓也が「階級間分配率命題」として論じて以降、すくなくからぬ先行研究がある。(千賀重義『リカードウ政治経済学研究』では、この箇所についての詳細な分析を加えた箇所の注(千賀 [8] p.205)で、吉澤論文もふくめて、諸研究が紹介されている。⁹⁾しかしながら、吉澤は羽鳥 [10] (初出は1979年、吉澤のこの論文の4年前)を含めて、それらの先行研究に一切言及していない。

内田義彦の問題提起をうけて議会改革論や定常状態についての議論を主題としてきた吉澤は、一度はマルクスにその研究対象を広げてみたが、そこから転進し、より狭く、価値論、分配論に立ち入ろうとした。しかし、そうなるトリビアリズムと吉澤が評するような先行研究にも立ち向かわざるをえないはずだが、その準備は十分ではなく、吉澤のリカードウ研究は隘路に入り込んでいったのではないか。

6 「リカードウ『原理』の構成問題(上)」 (1984年3月)

前節での論文と同様、この論文もその主題が何であるのか、読者にとっては理解が容易では

ない。通常の論文の形式では、冒頭に問題の所在が手短かに要約されるが、そのような形をとっていない。主題を要約したと思われる箇所を強いて引用すれば『原理』の三群構成、およびその第一群にあたる「経済学原理」の構成についての、スラッファ、堀、真実、中村、羽鳥卓也の諸氏の諸説を比較検討し、私見を提出する形で、中村氏に回答したい」という冒頭節最終行がそれにあたる。文字通りに受け止めれば、批判への回答ということになる。

本論を読み進めると、論じられているのは、まずは『経済学および課税の原理』第19章「貿易路における突然の変化について」の位置づけである。ただし、そこで問題とされているのは単に19章の位置づけにとどまらず、いわゆる第三群（19章から終章の32章まで）をどのように理解するか、ということである。スラッファがこれを（19章は別として）「論争的諸章群」とするのに対し、吉澤は単なる学説批判ではないという。吉澤はリカードウ経済学の全体を「理論→現状分析→政策批判」（吉澤【18】p.43）のなかに位置づけなければならない、との自説を対置したうえで、「第19章は、理論の時論への具体的適用という実践的観点からの、諸学説の批判の序説」（吉澤【18】p.44）と書く。その後の章で吉澤は第18章救済税の内容について立ち入った分析をしているが、これはスラッファの第18章と19章をつなげる解釈に対する批判である。したがって、この論文の主題は第19章の位置づけにあり、そのことをつうじて、リカードウ経済学の全体像を示そうとするものと理解してよいだろう。

この論文を読むに際しての隔靴搔痒の感は、これが（上）で終わっており、（下）が書かれていないことに大きな原因がある。この論文の冒頭に示された目次によれば、次号では、「IV「経済学原理」の構成（1）」、「V「経済学原理」の構成（2）」が書かれることになっていた。おそらくそこで、この論文の本来の主題である、「経済学原理」の構成」問題が論じられる構想

だったのだと推測される。その意味では、この（上）は、そのための序論に過ぎない。本来書かれるべき本論が書かれていないことが、この論文を読みにくいものになっているのではないか。

逆にいうならば、ここで議論されている第19章についての吉澤説が説得力をもつか否かは書かれざる（下）に掛かっているといってもよい。しかし、目次をみても（下）には具体性がなく、この論文の末尾が「次号へ続く」ではなく「未完」とされていることからすると、（下）について、どこまで具体的な構想があったのかは疑問だ。上述したように、この論文の冒頭での主題提示部では、中村広治の吉澤批判への回答がこの論文のテーマであると書かれており、（下）での内容には触れられていないこともあわせて考えると、（上）で終わることが確信犯的に予定されていたのではないかと推測される。

V 内田義彦とスラッファ

吉澤の研究業績を以上のように時系列的に概観したとき、ここで取り上げた6本のうち、最後の2本はそれまでの4本と趣がことなっていることに気づく。最初の4本は、吉澤が設定した主題に沿って議論が展開されているのに対し、後の2本は他の研究者のリカードウ研究論文への批判、ないし反批判である。もちろんそのような論述のなかに吉澤独自のリカードウ像が貫き通されていると言えなくはない。しかし、問題提起力において精彩を欠いているようにみえる。

なぜなのか。山田盛太郎を制度上の師とする吉澤は、大枠としては講座派マルクス経済学の知的伝統を受け継いでいることは確かである。しかしながら、経済学史研究者としては、それまでのマルクス経済学の伝統である、経済学の歴史をマルクスの『剰余価値学説史』にしたがって読み解くような方法を拒否しようとしたのではないか。その際、梃子となったのは内田義彦の存在である。内田義彦の独自の経済学史研究

の方法をわがものとすることによって、従来の剰余価値論形成史的なリカードウ解釈を乗り越えようとした。議会改革論や発展的社会像を論じる際には、その方法は成功したかに見えた。しかしながら、議論がリカードウ経済学の要諦である価値論や分配論にいたると、結局はマルクスを参照枠としてリカードウを解釈する、という限界を超えることはできなかった。リカードウに、労働価値説とは異なる発想がある、という可能性に思い至ることはなかったのである。

しかしながら、リカードウ研究の流れは、おそらくはスラッファを契機として大きく旋回した。スラッファは、リカードウにマルクスの労働価値論とは異なる発想を見出し、それを現代に蘇らせてみせた。リカードウ研究の解説格子を交換したのである。スラッファ以後の研究者は、したがって、もはやマルクスの価値論・剰余価値論の形成史上にリカードウを位置づけるというような読み方から、解放されつつあった。

にもかかわらず、スラッファの主著と向かい合うことをしなかった吉澤は、結局『剰余価値学説史』の重力圏から脱することができなかったのではないか。

1 スラッファの影響

吉澤がスラッファのリカードウ研究のどの部分からどのような影響を受けたかははっきりしない。64年に『原理』の翻訳を出し、その解説を書いているが、そこにはスラッファの「編者序文」への言及は見ることができない。そこでスラッファのリカードウ解釈は、とくに不変の価値尺度や穀物利潤論などは、おそらくは当初は研究者にも十分理解されず、『商品の生産』が60年に出た後、ひとつひとつの理解するところとなったことと思われる。しかし、吉澤にはその『商品の生産』への言及もみられない。

また、不変の価値尺度問題については、当然それについて触れるべきある文脈で、「リカードウの不変の価値尺度論そのものの紹介ないし

検討は、さしあたり不要なので、おこなわない」（吉澤【17】p.15）と書いている。

また、スラッファが不変の価値尺度を問題にしていることに触れ、「最近の内外のリカードウ研究は、このスラッファの問題提起に触発されて進められている側面が強い」（吉澤【17】p.4）との認識を示しているにもかかわらず、その具体的内容について一切触れていない。

他方で、吉澤は『リカーディアーナ』に「リカードウ研究の道を私が歩むようになった一つの契機は、多くの新資料を含むこの『全集』の刊行と、その各巻にスラッファが（ドップの協力をえて）付した解題から私が受けた新鮮な理論的刺激にある」（吉澤【15】p.4）と回想している。しかしその「理論的刺激」の中身がなんであったのかは、うかがい知ることはできない。筆者のみるところでは、モーリス・ドップやスラッファの経済学史観、すなわち価値と分配を独立しているとみなす経済理論の系譜（剰余アプローチ）と、相互依存的に同時決定されるとみなす系譜を分けてとらえる考え方を吉澤はとらなかった（多くの日本の研究者同様）と考える。同じく『リカーディアーナ』に書いたエッセイで「リカードウ研究の主流が思想史的視野を欠いた狭義の経済理論史的研究に——それも蓄積論視角の乏しい価値論＝分配論の研究に——おちいったことが、リカードウ研究から社会科学としての水々しさとふくらみを失わせた」（吉澤【9】p.2）とネガティブに書きとめているところの「狭義の経済理論史的研究」、**「価値論＝分配論の研究」**がスラッファによって開かれたリカードウ研究の新たな流れとみることができるとしたら、吉澤の本音はアンチ・スラッファであったのではないか。吉澤は自らのリカードウ経済学の理解は、スラッファと対極にあると受け止めていたのではないか。つまり、スラッファの、とりわけ『原理』の解釈が、リカードウを狭義の経済学の理論として突き詰めようとするのに対し、吉澤は議会改革論などを含めたより広い意味での経済学としてリカー

ドウを復位させようとしたのではないか。

もうひとつは、やはりマルクスの影響が強かったであろうことも指摘しておかなければならない。スラッファ理論はマルクスの労働価値論とは異質な理論である。マルクス経済学者であった吉澤にはそれは受け入れがたかったと考えられる。

ただし、スラッファと距離を置くこのような傾向は吉澤に限ったことではなく、竹永進によれば「スラッファが『全集』第一巻への序論で示した独特のリカード理論解釈の重大さ」は、堀経夫をはじめとして多くのリカードウ研究者によって認識されることはなかったとのことだ。(竹永〔9〕p.81)

竹永が指摘するように、日本の多くのリカードウ研究者は『商品による商品の生産』のリカードウ研究にもつ意義を高く評価していない。リカードウはスラッファが言うような意味での穀物比率論あるいは不変の価値尺度論などは主張していない、という立場をとっているように見受けられる。

他方で、スラッファによる『全集』の編集についての言及は、いくつも見られる。まとまったものとしては、吉澤【15】、吉澤【18】に見られるが、吉澤【15】ではイギリス滞在時にスラッファと会う機会があったこと、その際に編集問題（議会改革についての二つの論考を『全集』収録に際しては執筆順序とは逆に行っていること）について言葉を交わしたことが書かれている。スラッファ版『全集』の吉澤への影響は、その理論研究での貢献ではなく、もっぱら史料編纂としての仕事にあったのではないか。

スラッファと吉澤との関係について、以上のように考えを進めてきたときに、筆者は日本におけるスラッファ受容にみられるある種のねじれのようなものに思いを致さざるをえない。竹永が指摘しているように、『商品による商品の生産』でのスラッファ理論、そしてそれに基づくリカードウ解釈は、「マルクス経済学の素養を背景に持っていた20世紀後半のある時期まで

の日本のリカードウ研究者とは一線を画する」菱山泉のような研究者によって「ほそぼそと」(竹永〔9〕p.82)議論されてきた。

それに対して、吉澤などがまさに「マルクス経済学の素養」をもった研究者であり、その研究は基本的にはマルクスの『剰余価値学説史』をベースにした学説史研究である。しかし、筆者のようなマルクスの転形問題について関心をもつものにとっては、そのような、マルクス経済学を背景にしたリカードウ研究よりも、菱山、あるいは山下博などの諸研究から学ぶところが多く、吉澤などのリカードウ研究は、筆者のような立場からのマルクス価値論研究に示唆するところはなかった。

なぜそのようなことになるのか。それについての、ひとつの答えは、スラッファの標準体系論は実はリカードウの不変の価値尺度問題への解答ではなく、マルクスの転形問題への答えだったのではないか、というピエール・ポルタの仮説である。この点について、詳述する余裕はないが、標準体系では、体系全体の生産物と剰余生産物の物的構成比が等しいため、価値あるいは生産価格のどちらで測っても同じことになる。スラッファは「分配から独立した価値尺度」が不変の価値尺度であると解釈するのだが、リカードウの場合は、資本蓄積にともなう分配率の変化に対して不変な価値尺度、ということであるが、スラッファには資本蓄積というような視点は無い。その意味でも、スラッファの理論はマルクスの静的な転形問題にこそふさわしいといえる。利潤率がゼロの場合でもプラスの場合でも、つまり異なった分配率でも不変な尺度と解釈できるからである。

菱山などはスラッファの標準体系論にもとづくリカードウ解釈をうけいれるのに対し、吉澤などはスラッファのリカードウ解釈を拒否する。リカードウ自身の文言に即して読む限り、スラッファの解釈は無理がある。しかし、他方でリカードウをマルクス価値論形成史のひとつの通過点とみなす解釈も無理がある。その意味で、

スラッファのリカードウ解釈は、マルクスのバイアスが強い日本のリカードウ研究に対しては、ある種の解毒作用をもったのではないか。ただし、吉澤などには、その解毒剤は効かなかった。

2 内田義彦の影響

先に引用した酒井の「追悼」によれば、「半封建的な日本資本主義」という山田の捉え方は、また「歴史の科学としての古典経済学」という内田の規定は、これを尊重し、終生保持し続けたとのことだが、リカードウ研究へと導かれたのも内田の示唆によるものであり、内田の影響がより強かったと思われる。上述したように、議会改革論など、初発の研究を方向付けたのも内田から得た示唆による。先に引用した学部学生時代の回顧に「マルクスの「絶対的ならびに相対的剰余価値」という把握の、「ならびに」の意味が鮮明に出ていたと評価され」とあるが、このことの意味は大きい。(吉澤は、同じ回想を1992年にもしている。)先に引用した吉澤のリカードウ議会改革論研究を方向付けた内田論文の一節で内田が論じていたのがまさにこの問題だからだ。そこで内田は書いている。「資本の労働に対する包摂(——それは剰余価値の生産が絶対的並びに、相対的剰余価値の生産として現れるのに対応して、形式的並びに実質的包摂としてあらわれる。形式的な包摂は歴史的に前段階であるとともに、そこにおいては資本の本質=暴力性は明確にあらわれている。だがそれゆえにまた実質的包摂を含まない形式的包摂の段階においては資本の労働に対する支配は完成しない。たえず他の力によって補充されねばならない。)(『内田〔5〕p.188, ただし『潮流講座』と若干違っているので引用は『潮流講座』にしたがった。)吉澤は議会改革論文で内田のこの注を引用してはいるのだが、なぜこの部分を省略しているため、吉澤の引用文には「剰余価値の生産が絶対的並びに、相対的剰余価値の生産として現れる」との文言は現れない。

しかし、ここで内田が強調した「並びに」が、内田が吉澤の報告を評価して言った「「ならびに」の意味が鮮明に出ていた」という文言と呼応していることはあきらかであろう。(吉澤が内田に「賞めていただいた」(吉澤【26】p.157)というこの研究会の時期は、内田が上記の論文を書いた時期にほぼ重なっている。)『資本論の世界』では、絶対的剰余価値と相対的剰余価値との内田独自の把握の仕方が基軸的な論理になっていることを想起されたい。

ここで注意すべきは、吉澤が継承する内田義彦の方法は、経済学史の発展を理論そのものの発展として叙述するのではなく、時論的研究を媒介として理論が形成され、その理論がふたたび次の時論へとつながるといふ、時論→理論→時論→理論……という形を与えたことによって、歴史的アプローチとして、それまでの方法論とは異なっていたという点である。とはいえ、その際の理論の最終的な到達点が結局はマルクスのそれであり、その理論自体は、たとえばリカードウ研究の深化によって再審に付されるということはないということである。リカードウがどのような歴史的課題と取り組んだのか、という認識も、マルクスによる資本主義の段階規定、すなわち形式的包摂と実質的包摂のもとに位置づけられるのである。

吉澤が「発展的社会把握におけるリカードウとマルクス」などでも書いていることをあえて図式化して要約すれば、吉澤はリカードウが相対的剰余価値、資本主義のポジティブな側面のみを捉えているのに対し、マルクスは当初はネガティブな側面のみを強調したのに対し、リカードウのそのような資本主義認識を媒介にして、相対的剰余価値の論理の背後を貫く絶対的剰余価値の論理、という重層的な資本主義把握に到達した、ということであろう。吉澤はリカードウとマルクスをそのように捉えている。だとしたら、そのような「リカードウとマルクス」の捉え方は、前述の内田論文での注での指摘の枠内ということになるのだが、吉澤はそれをマル

クスの価値論・剰余価値論・資本蓄積論という理論構造として具体化しようとしたと言えるだろう。

吉澤のこのようなリカードウ、マルクス研究の視角は、日本の高度経済成長という時代背景に大きく規定されていたとみて間違いないだろう。日本資本主義の新たな発展という現実を前にして、ともすれば資本主義のネガティブな側面のみを一面的に強調してきた旧来のマルクス経済学は大きく方向転換を迫られていた。内田のマルクス研究はそのような時代の要請に棹さすものとなっていた。そしてそれが、「リカードウとマルクス」という問題意識を介して、リカードウとマルクスの発展的社會把握という関心へと吉澤を導いたのではないか。

なぜ吉澤はあえてマルクス研究にあしを踏み入れたのか。当時の日本でのマルクス研究の隆盛に刺激された、というのはひとつの理由ではある。しかし、同時に内田のスミス研究がその独自のマルクス研究と切り離しがたく結びついていたこと、このことを強く意識していたからではないか。「スミスとマルクス」に対する「リカードウとマルクス」。マルクスを対置することによってこそ、リカードウの現在の意味を十分に引き出すことができる、と考えていたのではないか。

結論からいうならば、吉澤のその試みは十分な成果を生み出すことはできなかった。マルクスの『剰余価値学説史』をベースにしたリカードウ解釈から意識的に距離をとろうとした吉澤は、リカードウの議會改革論や発展的社會像という、それまでの日本のリカードウ研究では言及されてこなかった領域を積極的に切り開くことによって、新しいリカードウ像を提示しようとした。しかし、議會改革論にしても、発展的社會像にしても、吉澤の研究プログラムでは最終的にはリカードウの価値論・分配論に基礎づけられなければならないはずである。しかし、吉澤が価値論・分配論に立ち入ったとき、結局は旧来のマルクス経済学の伝統的な理解の枠組

みから脱することができなかった。労働価値論者リカードウという枠組みを疑うことは吉澤にはできなかったのである。

リカードウは労働価値論者である、という思い込みを棚上げした上で、『原理』の諸章をより詳細に読み解く作業を進めたならば、より多くの成果を望めたように思う。しかし、この国の経済学史研究の知的伝統のもとでは吉澤はそのような道へ進むことはなかった。吉澤ほどの知性によってもなお、である。吉澤の次の世代の研究者は、リカードウを労働価値論者と無前提に仮定することなく多様なリカードウ像を競っている。あきらかにひとつの時代が終わったのである。

[注]

- 1) その意味で、本稿は日本におけるリカードウ研究を包括的に取り上げるものではない。そのような研究としては、竹永〔9〕を参照。
- 2) ここで、スラッファの標準商品論とマルクスの労働価値説との関係について一言しておけば、前者は労働価値説不要論へと道を開くものであった。なぜなら、労働価値概念が要請される根拠のひとつとして、そのようなアグリゲータを用いることなくしては、賃金－利潤の線形の相反関係を主張しえない、という主張があった。相反関係そのものは、単調減少の相関が言えればよいのであるから、相対価格でも言いうる。しかし、それらが何かしら実体的なあるものからの控除であることを強く主張しうするためには、片方が増えたのと同じ分だけもう一方が減る、という線形の関係が言えなければならない、と考えられたのであろう。スラッファが言うように標準商品で尺度することによって、労働価値概念をもちいなくとも線形の相反関係が言えるのである。
- 3) 酒井〔6〕
- 4) この論文のタイトルにある「1817年」は、発表当初は「1815年」であったが、改訂版以降、『原理』発行年の「1817年」にあらためたとのこと（吉澤【21】p.41）。初版での表題は「古典経済学の完成—1815年とダヴィッド・リカード—」。
- 5) この論文は未見。
- 6) たとえば『「ドイツ・イデオロギー」における「分業」の論理』『思想』、1968年12月。
- 7) リカードウ賃金論のより整理された説明として吉

- 澤【16】を参照。
- 8) 西村弘の追悼文(石塚〔3〕)で筆者が言及したが、西村のマルクス研究は、それを引き継ぐものであったと見ることもできる。
- 9) 千賀の注(千賀〔8〕p.205)では、吉澤【21】が独立の論文として扱われて、そこから引用されている(吉澤【21】p.85)が、これは吉澤【17】と同一の論文であり、そこで引用されている文言は吉澤【17】p.21)に初出する。
- 〔参考文献〕
- (ただし、吉澤のものは年表に付した番号で表記した。ここでは吉澤以外の文献をあげる。)
- 〔1〕石塚良次、「標準商品論と転形問題の位相——スラッフアとマルクスの交錯——」、『専修大学社会科学研究所月報』,1992年12月(ただし、1987年10月17日、経済学史学会関東部会での報告論文の補正再録)
- 〔2〕-----、「新リカード学派」,伊藤誠編、『経済学史』,有斐閣,1996年,所収。
- 〔3〕-----、「追悼」,『経済学史学会ニュース』,第37号,2011年1月,<http://jshet.net/docs/news/nl37.pdf>
- 〔4〕泉武夫,「献辞」,「吉澤芳樹教授 履歴・業績」,『専修経済学論集』第32巻第3号,1998年3月
- 〔5〕内田義彦,「イギリス重商主義の解体と古典学派の成立」,『内田義彦著作集』第10巻,1989年,岩波書店(初出は、『潮流講座経済学全集』,第8回,潮流社,1949年)
- 〔6〕酒井進,「追悼」,『経済学史学会ニュース』,第45号,2015年1月 <http://jshet.net/docs/news/nl45.pdf>
- 〔7〕スラッフア,ピエロ,『商品による商品の生産』,邦訳1962年,有斐閣,(原著1960年)
- 〔8〕千賀重義,『リカードウ政治経済学研究』,1989年,三嶺書房。
- 〔9〕竹永進,「大戦間期における日本のリカード研究」,『経済論集』(大東文化大学),2014年10月
- 〔10〕羽鳥卓也,『リカードウ研究』,1982年,未来社
- 〔11〕リカードウ,デイヴィッド『経済学および課税の原理』,堀経夫訳(『リカードウ全集I』),1972年,雄松堂。

【吉澤芳樹 略歴と研究業績】

- 1928年3月15日 大田区南馬込に生まれる
- 1944年3月(16歳) 都立第一中学校四学年終了(旧府立一中は都政施行(43年)後都立一中に改称,現在の日比谷高校)
- 1946年10月 (内田義彦,専修大学助教授就任)
- 1947年3月(19歳) 成蹊高等学校文化乙類卒業
- 1950年3月(22歳) 東京大学経済学部経済学科卒業
- 1951年 (スラッフア版『リカードウ全集』刊行開始第1巻『経済学および課税の原理』)
- 1952年12月(24歳) 経済学史学会入会。後に,土地制度史学会,経済理論学会の会員になるも退会
- 1953年1月(24歳) 【1】論文「古典経済学の完成—1815年とデイヴィッド・リカード—」(出口雄三編『経済学史』ミネルヴァ書房,(この論文の表題は,改訂版から「1817年とデイヴィッド・リカード」に改められた)
- 1953年3月(25歳) 東京大学大学院特別研究生前期終了
- 1955年3月(27歳) 【2】論文「地主制批判としてのリカードウ経済学の基礎構造」(未見)
- 1955年3月(27歳) 東京大学大学院特別研究生後期終了
- 1955年4月(27歳) 専修大学商経学部兼任講師
- 1957年3月 (山田盛太郎,東大退官,専大教授就任)
- 1958年4月(30歳) 専任講師
- 1960年5月 (スラッフア『商品による商品の生産』刊行)

- 1960年（32歳） 【3】 解説「マルサスとリカードウ」（内田義彦と共同執筆），大塚久雄・出口雄三・内田義彦編，Chapters from the Great Economists，学生社，（未見）
- 1962年 4月（34歳） 助教授
- 1964年 3月（36歳） 【4】 翻訳と解説『経済学および課税の原理』，『世界大思想全集』，河出書房新社
- 1967年 5月（39歳） 【5】 研究会報告「日本資本主義確立期および帝国主義成立期における関税政策論争——序論（1）」，『専修大学社会科学研究所月報』No44
- 1968年 4月（40歳） 教授
- 1968年11月（40歳） 【6】 論文「リカードウの議会改革論と経済学の分析視角」，『専修経済学論集』第6号
- 1970年 3月（42歳） 【7】 論文「マルクスにおけるリカードウ理論の発見と批判」，専修大学社会科学研究所編『社会科学年報』第4号，未来社
- 1970年 6月（42歳） 【8】 論文「発展的社会把握におけるリカードウとマルクス」，『経済学史』，筑摩書房
- 1970年 8月（42歳） 【9】 評論「社会科学としてのリカードウ研究の復位」，『リカーディアーナ』第4号（『リカードウ全集X』付録）
- 1972年 2月 （邦訳『リカードウ全集』第1巻刊行）
- 1972年 6月（44歳） 【10】 論文「経済学の成立（2）——古典経済学の確立と解体」，『経済分析入門』有斐閣（未見）
- 1973年 5月（45歳） 【11】 翻訳，B・S・ターナー「社会的停滞性の概念——功利主義とマルクス主義——」『専修経済学論集』第9巻第2号
- 1974年 （内田義彦，胃手術，療養生活）
- 1975年10月（47歳） 【12】 事典項目「古典学派の経済思想」，住谷・伊東編『経済思想の事典』，有斐閣
- 1975年12月（47歳） 【13】 翻訳と訳者あとがき，E・J・ホブズボーム「現代マルクス主義の諸傾向」，『専修大学社会科学研究所月報』No147
- 1976年10月（48歳） 社会思想史学会入会
- 1977年 3月（49歳） 【14】 事典項目「内田義彦」，『現代人物事典』（未見）
- 1978年 3月（50歳） 【15】 評論「リカードウの議会改革論」（『リカーディアーナ』（『リカードウ全集V』付録）
- 1978年 9月（50歳） 経済学部長（～80年8月）
- 1978年11月（50歳） 【16】 教科書「マルサスとリカードウ」，『経済思想史読本』（NHK大学講座テキストの増訂）この時期にNHK教育テレビの大学講座の講師担当
- 1983年 3月（55歳） 【17】 論文「リカードウの価値論と分配論」『専修経済学論集』第17巻第3号
- 1983年 4月（55歳） 専修大学北海道短期大学経済学科長
- 1984年 3月（56歳） 【18】 論文「リカードウ『原理』の構成問題（上）——三群構成と「経済学原理」の構成」，『専修経済学論集』第19巻1号
- 1987年 5月（59歳） 【19】 翻訳『経済学および課税の原理』，（上巻）岩波書店
- 1987年 6月（59歳） 【20】 訳者解説「『経済学および課税の原理』，（下巻）岩波書店
- 1988年 5月（60歳） 【21】 論文「リカードウの経済学体系」，森田桐郎編『国際貿易の古典理論』，所収（【1】，【17】の補正再録）
- 1989年 3月 （内田義彦逝去，3月18日，76歳）
- 1989年 4月（61歳） 学史学会代表幹事（～91年3月）
- 1989年 5月（61歳） 【22】 随筆「ありじごく」，『内田義彦著作集 第二巻』月報
- 1990年 3月（62歳） 【23】 事典項目「内田義彦」，『現代日本 朝日人物事典』

1991年3月（63歳）【24】「内田義彦の学問世界」, 『専修大学社会科学研究所月報』

1993年4月（65歳）【25】「内田義彦と日本経済思想史研究」, 『日本経済思想史研究会会報』（未見）

1998年3月（70歳）専修大学退職

2014年3月（86歳）【26】随想「重さの中の茶目つけ」（『内田義彦の世界』所収、ただし、1992年11月の発言を収録したもの）

2014年7月18日（86歳）逝去

以上主として、『専修経済学論集』第32巻第3号（1998年）, 「吉澤芳樹教授 履歴・業績」による。随筆などでリカードウ研究に直接関わらないものの幾つかは省略した。